

今こそ香大生が立ち上がる時

「**今**まで、自分から何かをやりはじめたことはない。誰かがやることを、影から支える生き方だった」という法学部3年の山中咲さん。あの日、3月11日に震災の映像を見た日に、「今度は何かをやらなくちゃ」という強い気持ちが沸き上がったそうです。少し迷ってから、勇気を出して友だちに送った「被災地のために香大生で何かやろう」というメール。そのメールがチェーンメールになって広がっていき、香川大学学生災害復興支援団体「SOKUS」が生まれました。

震災から2日後の13日、メールを見て集まった12人ほどのメンバーで、高松駅前募金活動を行ったのが最初の活動。初めて募金活動に参加した人ばかりで、何をすればいいのか分からない中、手作りの募金箱を手に持ち、ひたすら声をかけたそうです。

「今から考えると、怪しく見えたかもしれません。でも20万円ぐらい集まったんですよ」。

その後も参加メンバーが増え続けて、現在約50人。団体としてスムーズに活動できるように、会社法に詳しい法学部の先輩にアドバイスをもらって組織し、代表者の山中さんの下に事務作業を行う執行部10人が選ばれました。名前は、Supporting Organization by Kagawa University Studentの頭文字をとってSOKUS(ソックス)に。大学にも登録して、香川大学の正式な組織として活動を開始したのが、3月23日のことです。募金活動の現場に香川大学ののぼりを持って行けるので、安心して募金してもらえるようになりました。

GWまでは週5回、今も週3回の募金活動を継続。すでに180万円以上の募金を集めました。震災から3ヶ月が経ち、募金額は減ってきたようですが、そのことよりも募金する人の数が減ってきていることを、山中さんは気にしています。

「少額だと恥ずかしいと思っている人が多いみたいです。でも無理せずに、その時できる範囲で長く協力してほしいです。小さいと思っても、一人ひとりの力が集まれば、大きな助けになりますから」。

6月11日～14日には、山中さんをはじめ、数人のメンバーで被災地でのボランティア活動にも協力。その後、実際に見てきたリアルな現状を学生の視点で伝えたいと、学外の人も参加できる報告会も行いました。

勉強に部活、就職活動やバイト。忙しい生活の中から、メンバーは自分の時間を割いて活動を続けています。もし街でSOKUSの募金活動を見かけたら、金額は気にせず「被災地への思い」を込めて協力してください。

一日も早い東日本大震災からの復興を願って

継続して復興を支援していきたい

「**L**et's Help Japan!!」は、東日本大震災の復興支援を目的とした学生団体。現在も活動を続ける学生団体「Let's Help Christchurch」から派生して生まれました。農学部4年生、小池悠さんが代表を務め、香川大学の学生約20人が運営にあっています。

母体である「Let's Help Christchurch」は、2011年2月22日に発生した、ニュージーランドの都市クライストチャーチの震災復興のために、クライストチャーチの留学生と留学経験者を中心に組織された学生団体です。こちらの代表者の1人、大崎龍史さんも香川大学生です。活動を続ける中で3月11日の災害が発生し、自国のためにも活動しようと「Let's Help Japan!!」が誕生しました。その経緯からわかるように、小池さんをはじめ全メンバーは、「Let's Help Christchurch」にも参加しています。母体に復興支援団体としての実績があるため、被災地とのコネクションがすぐにつながり、4月7日には4人が宮城県の山元町へボランティアとして飛んでいくことができました。その際、町ごと津波に奪い去られた光景を見て、小池さんは大きなショックを受けたと言います。

「被災地に行くまでは「自分が代表としてうまく組織を運営しなくては」ということに気をとられていました。でもあの光景を見た時から「自分が」という思いが消えました。長くかかるであろう復興を、継続して助けていく必要があると考えようになりました」。

帰ってきてすぐに取りかかったのは、長く続けられる体制作り。現地情報部、物資管理部、企画広報部、会計監査部の4つの部門を作り、それぞれに責任者を置きました。現地情報部は常に被災地とコンタクトをとって、今現地に必要な支援を把握します。物資管理部は、その情報を元に、必要な物資を集める段取りを行っています。企画広報部は、既存のイベントに参加して活動を広めたり、独自のイベントを計画。会計監査部は、集まった募金や物資をきっちり管理することが仕事です。普段は各部門ごとの判断で行動し、メールと月に1回の定例会で情報を共有する仕組み。部門を分けたことで各人の仕事が明確になり、組織の運営を次の世代に引き継ぎやすくなりました。

小池さんが次にやろうとしていることは、SOKUSとの連携。同じ目的で動いている組織同士、協力すれば相乗効果があると考えています。

「SOKUSさんの募金活動は実績がある。人手が足りないところにうちのメンバーが手伝いに行くなど、バックアップ的な協力から始めたいと思います」。

復興支援に立ち上がった2つの組織が手を結んで、さらに大きなアクションが生まれそうな予感です。



SOKUS 代表
山中 咲
やまなか さき
法学部3年

Let's Help Japan!!
代表
小池 悠
こいけ ゆう
農学部4年

国際交流会
ランチプレゼンテーション会

KEYWORD

[ICESとKUFSA]

香川大学の日本人学生と留学生の交流を目的に設立された組織。日本人学生は香川大学異文化交流会 (ICES: Inter Cultural Exchange Society)、留学生は香川大学留学生会 (KUFSA: KAGAWA UNIVERSITY FOREIGN STUDENT ASSOCIATION) に所属している。

HPは<http://iceskufsa.blogspot.com/>
ランチプレゼンテーション会のHPは
<http://lpkai.blogspot.com/>



恥ずかしいのは
お互い様！
プレゼンで始める
国際交流



ICES 高木 涼 (たかぎ りょう)
KUFSA 買 冉 (かひ まえ)
留学生センター長
ロンリム



外 国の人と友達になりたいけど、英語で話すのって難しい！単語や文法が間違っていたら恥ずかしいし……

なんて考えたことはありませんか？
もしかしら、それはあなたが話しかけたいと思った相手も感じている悩みかもしれません。

「私も日本人の友達を作りたいです。でも、日本語を話すとき「恥ずかしい」と思っています」。

そんな気持ちを教えてくれたのは、香川大学留学生会「KUFSA(クフサ)」の幹部をつとめる中国出身のカ・ゼン(買冉)さん。ランチプレゼンテーション会、通称LP会は、こういった「日本人学生」と「留学生」の壁を取り払う交流の場として2011年3月にスタートしました。

会場は学生食堂の2階。月曜日のお昼休みに、20〜30人の参加者を前にして日本人学生と留学生がそれぞれ1人ずつ司会とプレゼンテーションを行っています。日本人は英語で、留学生は日本語で発表するのがルール。出身地や自慢の郷土料理など、毎回様々な話題が登場し、プレゼン後の10分間の交流時間にはその感想や気経なおしゃべりが交わられています。

「僕は香川から安く行く世界遺産・姫路城と厳島神社を紹介しました。大学に入るまでは国際交流なんて頭にもなかったんですが、留学生と交流すると考え方が全然違って、面白いです」。

と語るのは香川大学異文化交流会「ICES(アイセス)」の幹部・高木涼さん。留学生センター長のロンリム教授の指導のもと、カ・ゼンさんと高木さんがそれぞれの立場の代表となってLP会を運営されています。

「カ・ゼンさんも高木君も大いに頑張っています。プレゼン後の10分間の提案をしたのは高木君です。中国の学生さんは自分の意見をハッキリ言えるところが素晴らしいです」とロン教授(留学生と聞く)と英語で話しかけなくちゃ！

と思われませんが、留学生はそもそも日本に興味があつて来てた人たちなので実は日本語が堪能。普段は日本人学生と日本語で会話しているんです。日本語はニュアンスで伝わるし、英語では表現できない言葉があつて便利、とロン教授もカ・ゼンさんも日本語の魅力を教えてくれました。

「『文法と単語』と考えると語学は面白くないけど、『ことばと文化』と考えると面白いですよ。私が日本に来た理由の一つも、子どもの頃から日本のアニメを見てきたことだから……」。

とカ・ゼンさんからは中国で出会った日本の漫画の話題も飛び出しました。
「このようにLP会は話題のきっかけ。プレゼンのスキルを磨ける。英語力を上げることもできる。他の国の学生と仲良くなるチャンスがある。まさに一石二鳥、三鳥。ここであまく連携がきて、次の展開が生まれることに期待しています」。

とロン教授は学生たちの活動を楽しみに見守っています。ちなみにクフサ、アイセスはLP会以外でも交流イベントを企画しています。その一つが今年15回目を迎える「島旅行」。これは毎年100人くらい参加する大規模なもので、一般参加もOK。興味がある人はぜひ2団体のHPをチェックして下さいね！

KEYWORD

**実践型
インターンシップ**

従来の「体験型」インターンシップと違い、企業の課題解決が主なテーマ。受入企業から実際に問題となっている課題の提示を受けた学生が、担当教員のサポートを得ながら企業と一緒に「実践的に」解決に取り組む。

香川大学「実践型インターンシップ」
地域マネジメント研究科



市場調査やコンビニのバイヤーさんとの綿密な打合せを行った後、幾度となく失敗を繰り返しながらも納得の商品「讃岐三昧」を完成。店内POPや販売協力、PRイベントも積極的に行いました。

香川県産米使用
讃岐三昧
さぬきざんまい

学生プロデューサーのおむすびが
コンビニでヒットを飛ばす

オムライス風おむすび 担々風おむすび

横溝コーチンを使ったオムライスを、五子焼きで包んでいる。

担々麺のスープで焼豚Pを味付けして、おむすびの中に入れている。



むっぽくうどん風おむすび

人参・大根・油揚げなど、しっぽくうどんをイメージした具材を使った炊き込みご飯を、地元のマルキン醤油で味付け。

「コンビニやスーパーで並んでいるいろいろなおむすび。あの具材を使ったら、もっとおいしいおむすびが出来るのにな」と思ったことはありませんか？その夢を叶えたのが、地域マネジメント研究科の4人、河村卓哉さん、李曉鑫さん、水尾峻輔さん、坂本幸司さん。4人がプロデューサーとして3個入りおむすび「讃岐三昧」が、2011年4月から5月にかけての4週間限定商品として、四国と広島県の一部島嶼部のサークルKサンクスで売り出されました。

4人が商品開発をするきっかけになったのは、実践型インターンシップ。受け入れ先の企業、讃岐夢豚を使った焼豚「焼豚P」を手がける有限会社ハイブラインの社長から、「コンビニ向けの新商品開発を課題として出されました。学生の柔軟な感性による、斬新な商品を期待してのごでした。4人がまず行ったのは、「コンビニ利用者250人へのアンケート。よく買う商品や好みの味付け、主な価格帯など消費指向を調査しました。その

結果から、開発商品を「おむすび」に決定。コスト、具材とご飯のバランス、食感など、いろいろなおポイントに配慮しながら新商品のアイデアを練っていました。

そのアイデアをジャッジしたのは、コンビニのプロのバイヤーさん。河村さんは「ここから、苦勞の連続。開発の正念場でした」と振り返ります。味のバランス、製造工程、すれやすさなどを厳しく指摘され、いくつもの案がボツにされました。しかし、そのやり取りの中から「3個セットで売る」というコンセプトが生まれ、「それなら香川の食材を使った和洋中の3種類にしよう」と意見がまとまりました。最終的に出来上がったのはこの3種類。●しっぽくうどん風おむすび(和) 人参・大根・油揚げなど、しっぽくうどんをイメージした具材を使った炊き込みご飯を、地元のマルキン醤油で味付け。●オムライス風おむすび(洋) 讃岐コーチンを使ったチキンライスを、五子焼きで包んでいる。

●担々風おむすび(中) 担々麺のスープで焼豚Pを味付けして、おむすびの中に入れている。

売り上げ目標は4週間で2万個。過去の同様のキャンペーンで、最も成功した数字と同じにしました。店内POPを手作りしたり、香川県庁で行われたPRに参加したり、4人もインターンシップの枠を超えて協力しました。その結果、見事目標をクリアし、バイヤーさんからは「この商品の発想は私たちの中からは出てこないものだ」、ハイブラインの社長さんからは「ほんとうによくがんばった。ありがとう」という言葉をもらいました。「インターンシップのおかげで良い経験が出来た」という4人、地域企業との連携関係が深い香川大学では、夢のあるプロジェクトが次々に生まれています。



河村卓哉
かわむら たくや

水尾峻輔
みずお しゅんすけ

李曉鑫
リ シャウシン

坂本幸司
さかもと こうじ